

美術

美術科の目標の一つ一つの文言の意味はどうなっているのか。

美術科の目標の一つ一つの文言の意味は、以下のとおりである。

「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して」について

今回の改訂では、生徒一人一人の資質や能力の向上と、自己実現を図ることを一層重視した。

表現においては、**育成する資質や能力の視点から内容を整理し、発想や構想に関する項目と、創造的な技能に関する項目とに分け、両者を組み合わせて題材を設定するようにした。**そのため絵、彫刻、デザイン、工芸といった枠組みだけではなく、生徒の実態などを踏まえて幅広く題材を考えることが重要である。

鑑賞においては、自分の感じ方を大切にしながら主体的に造形的なよさや美しさなどを感じ取ることを基本とし、**古来、人々が大切にしてきたものや価値に気付かせ、人間が営々としてつくりだし、継承してきた美術作品や文化とその精神などを味わい理解し、それらを尊重する態度を育てることが重要**である。同時に、**生活を美しく豊かにする造形や美術の働きなどを実感させるような指導が大切**であり、美術作品だけではなく自然や身の回りの環境、事物も含め、幅広く鑑賞の対象をとらえる必要がある。

「美術の創造活動の喜びを味わい」について

表現活動においては、ただ自由に表現するというのではなく、自己の心情や考え、イメージを基に**自分が表現したいことをしっかりと意識して考え、それが自分の表現方法で作品として実体化されたときに実感する**ことができる。

鑑賞活動においては自分の見方や感じ方に基づいて**想像力を働かせて見ることで、作品に対する見方が深まり新たな発見をしたり感動したり、自分にとっての価値をつくりだしたりしたときに味わうことができる。**創造活動の喜びは、このような活動の主体者の内面に重点を置いた活動が展開する中で、**新しいものをつくりだしたいという意欲とそれを実現するための資質や能力が調和よく働いたときに豊かに味わうことができる**ようになるものである。

美術はこのような表現活動や鑑賞活動を美と創造という観点から追求していく学習であり、それらを実感していく喜びは、充実感や達成感を伴うものとして特に大切にすることが必要である。また、創造したものが心や生活に潤いをもたらしたり役立ったり、他者に認められたりしたときも創造活動の喜びや自己肯定感を強く感じるものである。したがって、**美術の創造活動の喜びは、美術の表現及び鑑賞の全過程を通して味わわせることを目指している。**

「美術を愛好する心情を育てる」について

美術を愛好していくには「楽しい」、「美にあこがれる」、「考える」、「時の経つのを忘れて夢中になって取り組む」、「目標の実現に向かって誠実で忍耐強く自己努力をする」、「絶えずよりよい創造を目指す」などの感情や主体的な態度を養うことが大切である。

同時に、具体的に表現や鑑賞をするための発想力、構想力、表現の技能、鑑賞の能力などが求められ、愛好していく過程でそれらが一層高められる。このように、**美術を愛好する心情は美的愛好心をはじめ、生活における心の潤いと生活を美しく改善していく心や豊かな人間性と精神の涵養に寄与するものであり、表現及び鑑賞の能力とともに育成される**ものである。

表現活動においては、創造する喜びとつくりだした満足感や自信が次の活動に新たなかわりや意味をもたせ、更に高い課題意識を湧出させ、自己挑戦していく強い意志と愛好心になっていくようにすることを目指す。鑑賞活動においては、様々な美術作品や文化遺産などに触れ、味わい、理解することが美術を愛好することに深くかかわることから、鑑賞の楽しみ方を身に付け、文化の違いによる表現の違いやよさの理解などを深め、鑑賞活動を愛好し生活を心豊かにしていく態度を形成していくことを目指している。

「愛好する心情を育てる」ためには、自分のしたいことを見付け、そのことに自らの生きる意味や価値観をもち、自分にしかない価値をつくり続ける意欲をもたせることが重要である。

「感性を豊かにし」について

美術科は特に、対象のもつ美しさや生命感、心情、精神的・創造的価値といったものについての感性を中核としており、目に見えるものや、目に見えない想像や心、精神、感情、イメージといったものを可視化・可触化できる唯一の教科であるといえる。

現代の生活においては、柔軟に心豊かにたくましく生きていく視点からも感性の育成の重要性が指摘されており、美術において感性を育てることは極めて大きな意味をもっている。したがって、**表現や鑑賞の活動を通して視覚や触覚などを十分に働かせ、これまでの表現や鑑賞の経験なども生かして形や色彩、材料などからそれらの性質や感情、イメージなどを豊かに感じ取るような学習が重要**である。また、感性はその時代、国や地域などに見られる美意識や価値観、文化などの影響を受けながら育成されることから、**特に鑑賞では、作品や文化遺産などから、そのよさや美しさ、作者の心情やそれらを大切に守ってきた人々の気持ちや生き方、感謝や畏敬の念及び様々な国や人々が共通にもっている美に対するあこがれなどを**感じ取ったり理解したりする学習を積み重ねることが大切である。

感性とは、様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力であり、知性と一体化して人間性や創造性の根幹をなすものである。また、感性は、創造活動において、対象をとらえたり判断やイメージをしたりするときの基になる力として働くものである。

「美術の基礎的な能力を伸ばし」について

表現や鑑賞の指導事項については、一人一人の生徒が自ら確実に身に付けていくことができるよう適切な指導をするとともに、**一人一人にどのように身に付いているのかを評価し指導の改善・工夫にも一層意を用いることが大切**である。

「美術の基礎的な能力」とは、関心や意欲などを基に、豊かに発想や構想をし、創造的な技能を働かせてつくりだす表現の能力と、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り味わうなどの鑑賞の能力である。

今回の改訂では、「生きる力」をはぐくむための学力の重要な要素として、基礎的・基本的な知識・技能の習得、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等及び、学習意欲の向上が求められている。「美術の基礎的な能力」は、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等を含むものであり、その育成には、生徒の主体的な学習活動の中でこれらの能力が関連し合いながら、十分かつ有効に働くようにすることが重要である。

「美術文化についての理解を深め」について

これからの国際社会で活躍する日本人を育成するためには、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育や、異なる文化や歴史に敬意を払い、人々と共存してよりよい社会を形成していこうとするための教育を充実する必要がある。

美術においては、古くからの美術作品や生活の中の様々な用具や造形などが具体的な形として残されており、受け継がれてきたものを鑑賞することにより、その国や時代に生きた人々の美意識や創造的な精神などを直接感じ取ることができる。それらを踏まえて現代の美術や文化をとらえることにより、文化の継承と創造の重要性を理解するとともに、美術を通じた国際理解にもつながることになる。以上のことから、**美術科は文化に関する学習において中核をなす教科の一つ**であるといえる。

「美術文化についての理解」を深めることは、今回の改訂で新たに加わった内容である。改正された教育基本法において、教育の目標に「伝統や文化を尊重する態度を養う」ことが新たに規定されたことを受けている。

「豊かな情操を養う」について

美術の活動は、創造的な体験の中で感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美意識を高め、自己の世界として意味付けをし自らの夢や可能性の世界を広げていくことから、**豊かな情操を養うために特に適している**といえる。

情操を養うために、**表現活動においては、**自然や対象を深く観察し、よさや美しさなどの感じ取ったことや、自らの心の中を見つめそこから湧出した感情や夢などを、自分の表したい感じや気持ちを大切に描いたり、他者の立場に立って使いやすく美しいものをつくったりするなど、**思いを巡らせながら創造的に学習を進めることが重要**である。さらに、**鑑賞活動においては、**自然や美術作品、文化遺産などのよさや美しさ、創造の知恵や仕事への**共感・感動などを味わうことを通して情操を豊かに涵養することなどが大切**になる。

情操とは、美しいものや優れたものに接して感動する。情感豊かな心をいい、情緒などに比べて更に複雑な感情を指すものとされている。特に美術科では、美しいものやよりよいものにあこがれ、それを求め続けようとする豊かな心の動きに重点を置いている。それは、知性、感性、特性などの調和の上に成り立ち、豊かな精神や人間としての在り方・生き方に強く影響していくものである。